

研究ノート

日本の保育における質の評価スケールについて —日本語版で使用されている評価スケールを中心として—

Quality Evaluation Scale in Childcare in Japan
—Focusing on the rating scale used in the Japanese version—

木下 詩織

中京大学大学院社会学研究科修士課程

論文要旨

日本のみならず、世界各国では、保育の質についての関心が高まっており、各国で保育の質に関する評価スケールが開発され、用いられている。日本でも同様に、海外で作成された一部の評価スケールにおいて、日本語版がすでに出版され、使用されている。

本稿では、日本の保育の質における主な評価スケールについて概要の整理を行い、検討した。各評価スケールの側面から、保育の質向上のために作成されている日本版の保育の質スケールの発展が見られ、課題と可能性について考察を行い、展望を示した。

キーワード：保育の質 (Quality of childcare)

保育の質評価スケール (Childcare quality evaluation scale)

ECERS-3 (Early Childhood Environment Rating Scale-Third Edition)

ITERS-3 (Infant/Toddler Environment Rating Scale-Third Edition)

SICS (Process Oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings)

SSTEW (Sustained Shared Thinking and Emotional Well-being)

I はじめに

近年、待機児童解消のため保育所の量的な拡充がされている中で、子どもの豊かな生活や健やかな発達のための「保育の質」がいかに保障されているのか、という点について懸念が生じている。乳幼児期は、人生の基盤を形成する極めて重要な時期であり、子ども達の発達を支える保育のあり方が問われている。

保育所で提供されている保育の内容は、それぞれの保育所によって異なる。基本的には保育所保育指針を基に子ども達への保育が提供されているが、各保育所の保育方針や規定等の保育観も異なれば、子どもの定員や施設規模等の環境も異なる。このように、それぞれの保育所によって状況は異なるが、どの保育所でも“子どもの最善の利益のため”に保育は実施されている。しかし、昨今、日本の保育現場では、保育者の人手不足や不適切保育が問題となっている。そのような中で、どこまで子ども達一人ひとりの最善の利益のため、また一人ひとりを主体とした発達について考えることができているのだろうか。さまざまな子どもがいるため、集団保育の中で一人ひとりに合わせた保育をすることは、容易ではない。また、保育者は子ども達の保育だけでなく、保護者支援や地域の子育て支援等、業務が多岐にわたるため、対応していくことに困難を抱えている現状がある。

このような主な保育現場の状況の中で、保育の質を測る評価スケールはどのように活用されているのだろうか。日本語訳されている保育の質についての主な評価スケールの概要の整理を行い、検討することを目的とする。

II 保育の質とは

保育の質とは、社会・文化における保育の機能や方向性の捉え方や位置づけに依存する相対的・多元的なものであり、一元的に定義することができないものであるとされている（秋田・箕輪・高櫻，2007、秋田・佐川，2011、Dahlberg・moss&Pence，2013、淀川・秋田，2016）。また、OECD（2006）¹⁾では、保育の質をどのように捉えるか、という点について「志向性の質」「構造の質」「教育の概念と実践」「実施運営の質」「プロセスの質」「成果の質」の6つの側面に整理され、保育の質は、多元的システムモデルとして示されている。このように保育の質を一元的に定義することは困難であるということが示されている。

また、誰にとっての質か、どのレベルの話であるのかによって異なる定義がなされるだろうと述べられている (OECD, 2012)。

Ⅲ 保育の質スケール

Ⅲ. 1 ECERS-3 (Early Childhood Environment Rating Scale-Third Edition)

新・保育環境評価スケール①〈3歳以上〉

ECERS (Early Childhood Environment Rating Scale) は、1980年にアメリカで開発された。3歳以上を対象とし、保育の質を総合的に測定し、数値化する尺度である。基本的な保育の質の考え方はNAEYC²⁾の示す「発達にふさわしい実践 Developmentally appropriate practice=DAP」を根拠としている。このDAPの考え方は、アメリカの幼児教育・保育の場で広く共有されている。その後、1998年に改訂版ECERS-R (Early Childhood Environment Rating Scale-Revised) が発行され、2005年にはアップデート版が発行された。ECERS-3はこれらに続く、さらなる改訂版として2015年に発行された。また、ECERS-Eとは、イギリスにおいて、政府がスポンサーとなった幼児教育の大規模縦断調査であるEPPE研究³⁾の際に、ECERSを自国の文脈に合わせ発行したものである。

最新版であるECERS-3は、「保育者と子どもの関り」と「関わりを通して育まれる子どもの学びに向かう力」が強調されるものとなっている。そしてこの評価スケールは、アメリカや日本のみならず、世界の国々で広く使用され、保育現場の質向上に貢献している。

Ⅲ. 2 ITERS-3 (Infant/Toddler Environment Rating Scale-Third Edition)

新・保育環境評価スケール②〈0・1・2歳〉

ITERS (Infant/Toddler Environment Rating Scale) は、集団保育の質を総合的に評価するため、1990年にアメリカで開発された評価スケールである。2003年には改訂版がITERS-R (Infant/Toddler Environment Rating Scale-Revised) として発行され、2005年にはアップデート版 (Infant/Toddler Environment Rating Scale-Revised and Updated) が発行された。その後、これらITERS-Rとアップデート版の改訂版として2018年にITERS-3が発行された。

これまでの ITERS、ITERS-R は生後 30 ヶ月（2 歳半）までのクラスを対象として作成されていたが、ITERS-3 は生後 36 ヶ月（3 歳）までの範囲を対象として作成されている。この評価スケールは、乳幼児期の集団保育の全体的な質を測定する評価スケールのうちの一つである。子どもの広い範囲での発達のアウトカムの重要性に焦点を当てる一方で、進行中の活動場面での言語による相互作用を強調し、子どものアウトカムの予測度を高めるようにデザインされている（Thelma・Debby・Richard・Noreen・埋橋，2018）。ITERS-3 では、身体的、社会・情緒的、認知的領域を総合して乳幼児期の発達と教育を捉え、同時に保健衛生と安全を担保するという考え方と、スコアの決め方はこれまでの評価方法と変わりはないが、広範囲の研究で有効性が高いとされている。

Ⅲ. 3 SICS (Process Oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings)

子どもの経験から振り返る保育プロセス

SICS は、ベルギーで開発された LIS⁴⁾ をベースとして作成された、保育施設の自己評価のための評価スケールである。LIS は「経験に根ざした教育」という概念であり、保育者が子どもと深い関係性を保ち、子どもの「安心度」を前提として「夢中度」を高めるアプローチが追求される。この子どもの「安心度」と「夢中度」に注目し、子どもの経験の数値化を行う評価スケールである。この評価スケールを基にして SICS が開発され、多くの国に広がり、日本では日本の保育の実情に合わせて日本版 SICS が出版された。

日本版 SICS は、SICS の基本的な考え方や手続きはそのままに、日本の保育の状況に合わせて作成され、「自園の実践の良いところを見つける」という趣旨が強調されている。評価といえども段階づけに意味があるのではなく、保育者が相互理解を図り共通の認識を持つことが重要であるとされる。また、この評価スケールは、日本の保育でこれまで大切にしてきた保育観の一つでもある「子どもが安心して夢中になって活動に打ち込む」ことの大切さを認めることであるとされる（埋橋，2018）。

Ⅲ. 4 SSTEW (Sustained Shared Thinking and Emotional Well-being)

「保育プロセスの質」評価スケール

SSTEW は、2015 年にイギリスで発行され、日本では翌年 2016 年に発行

された。保育施設における保育実践を観察するための新たなツールであり、研究、自己評価や保育の向上、監査や第三者評価などで使用することを目的として開発された保育環境の評価のための尺度である。従来の保育の質に関する尺度は、空間や資源、活動、カリキュラムの質を評価するために作成されたものであったが、SSTEW は、さらに、安定・安心 (well-being)、自己制御、そして仲間や先生との感性豊かな応答的やりとりを通して促される集中して考えること (focused thinking) に焦点を当てている。保育施設での子ども達の経験に焦点を当てた観察をもとに振り返り、保育プロセスの質の向上を図ろうとする視点から作られ、子ども同士の、ともに考え、深め続けること (Sustained Shared Thinking=SST) と、子ども達の情緒的な安定と安心 (Emotional Well-being=EW) を保障するという、意図や関係性という側面に目を向けていることを特徴としている。これは、保育を受けた結果として、子どもの知的な能力や社会的、情緒的な能力がどこまで育っているのか、その育ちの状況から保育の質を議論したり、向上を促したりするという視点ではなく、保育の中での子どもと子ども、子どもと保育者や環境とのやりとりを関係論的に見ることから、日々の保育を振り返り、2歳から5歳の子どもの発達のプロセスにおいて最も大事なことを保障しようという視点である (秋田, 2016)。

また、一貫して「コミュニケーション」を基礎とする理論として、各項目が作成されている。子どもの情緒的な発達とともに、問題解決の活動へ集中することを支える保育実践とは、保育者と子ども達のコミュニケーションがあって初めて成り立つものであるとしている。さらには、語り合うこと、開かれた質問や考え方を共有することで可能となる導かれた思考も重要であるとしている。SSTEW では、複雑なコミュニケーションのあり方についての記述を通し、モノや出来事の外の世界についてだけでなく、感情や願いといった内なる世界も含めて、複層的に描き出されている (cassie silva, 2016)。

Ⅳ 考察

Ⅳ. 1 保育の質評価スケールで測れることは何か

ECERS-3 は、3歳から5歳の子どもの1つのクラスまたはグループに対して、一度に用いるよう作成され、全体的な保育の質を評価することができる。国際的にも広く使用され、調査研究も蓄積されており、スケールの信頼

性と妥当性も示されている。身体的、社会・情緒的、認知的領域を総合して乳幼児期の発達を捉え、同時に保健衛生と安全を担保するという考え方で、子どもの身体的な発達、子ども同士および大人との関係、子どもとのやりとりを前提とした指導を見ていく観察法である。総合的で世界共通の質の定義と、保育の質を示す根拠を保育観察に求め、その観察の信頼性を大きな特性としている。

ITERS-3は、0・1・2歳の乳幼児期の集団保育の全体的な質を評価することができ、ECERS-3同様に、国際的にも広く使用され、信頼性と妥当性も示されている。この最新版のITERS-3では、子どもと保育者の言語的な関わりの重要性がこれまでの評価スケールよりも強く反映され、日本語版に翻訳した埋橋（2018）も、保育所保育指針（2017）に示された「学びの芽生え」を支える人的環境、物的環境の具体的なありようが理解できる、日本の乳幼児保育が目指そうとする方向とかなりの部分で重なる、と述べている。評価項目にも相互関係（子ども同士、子どもと保育者の関り）に焦点を当てた項目が多く、物理的な環境だけではなく、やりとりを前提としている。子どもの広い範囲での発達の成果の予測度を高めるようにデザインされており、その予測性もある妥当性は確立されている。

SICSは、今、この場にいる子どもの活動をする過程・プロセスを中心に保育実践を評価することができる。2歳から5歳の子どもの発達を観察し、「安心度」と「夢中度」を評定することができ、そのスコアについて話し合いを行い、最終的な評価を決める。この評価は自園の良さを認めつつ、さらなる改善に向けて方法を考えることにつながる。保育者が客観的に自らの保育を振り返るきっかけとなり、自己評価をすることができる。

そしてSSTEWは、コミュニケーションを主とした保育実践を評価することができる。2歳から5歳の子どもの「ともに考え、深めつづけること」と「情緒的な安定・安心」を支える保育実践について考えることができると同時に、保育者と子ども、子ども同士の関係性、効果的なコミュニケーション、自己抑制を育てる保育実践について考えることができる評価スケールである。

各評価スケールは、日本の文化、考え方を考慮した上で、海外で作成された評価スケールを日本版として改訂し、作成されている。それぞれの評価スケールは、保育の質の異なる側面に焦点を当てている。そのため、一つの評

価スケールのみで全体の保育の質の評価を行うわけではなく、相互補完的に使用することで保育の質全体の評価を行うことができるとしている（淀川・秋田, 2016）が、今後さらに検証される必要がある。

Ⅳ. 2 保育の質スケールの課題と可能性

保育の質を評価するスケールは、さまざまな視点から保育の環境や関わりが評価され、その評価を基に、保育に携わる人々間で現状を把握し、話し合い、保育の質の向上を目指すために必要なツールである。評価することで、保育を見直すきっかけになったり、気づきを得たりと、保育の質を保障・向上させるため有効なツールであり、保育に携わる人が、環境や関り方、自分自身の保育を振り返ることで、子どもとの関わりもより良くなっていくことにつながる。

しかし、これらの評価スケールは、いずれも使用するにあたり、トレーニングを行うことが望ましいとされている。調査を実施するには、評価者養成のトレーニングを行うことが不可欠である。トレーニングを受けた者による客観的視点で保育環境を評価することは重要であるが、課題でもある。評価を実施するにあたって手軽さがなければ、日々多忙な現場の保育者はなかなか“評価を受ける”という行動にうつすことが難しい。また、保育者は一日を通して、また一週間を通して、さらにはひと月を通して、年間を通して計画を立てて保育を行っている。それら保育者の意図と、評価者の観察を行った基準としての評価に相違が生まれた場合、どちらかが適切だと判断することは困難も生じる。評価後の話し合いの場も設けられ、最終的に評価者により点数化されるが、この話し合いを丁寧に行わなければ、適切な評価にはつながらない。

そして、これらの評価スケールにおいては、発達特性のある子どもや、障がいを持つ子どもがどこまで含まれているのか、疑問である。集団保育の中で評価される質では、集団に馴染むことが難しい子どもや配慮が必要な子どもについては、どのように評価されているのだろうか。全体の保育の質を評価するにあたり、子ども一人ひとりの視点を考慮した評価スケールが必要ではないかと考える。配慮が必要な子どもや、より丁寧な関わりが必要である子どもに対して、その時に適切に評価されれば、子ども一人ひとりに対する今後の適切な保育が見え、先を見通した必要な支援方法も明確となる。

海外では子どもの発達と成果を評価対象とする評価スケールもいくつか開発されている。アメリカで作成された DRDP-PS⁵⁾ は、誕生から 12 歳までのすべての子どもを対象とし、子どもの発達を評価することができる。さらに、同じ子どもについて、異なる時期の複数の評定結果を比較することで、その子どもの発達の変化を把握することもできる。日本のカリキュラムは、子どもの発達ではなく、子どもの生活や経験に重点を置いているため、そのまま使用することはできないとされているが、日本の保育文化に応じた一人ひとりの子どもの発達を評価する、子ども主体の評価スケールの発展を期待したい。

V おわりに

“質が高い保育”とは、どれだけ子どもの発達に影響を与えるのか。一人ひとりの子どものために、どの保育所でも保育の質が保たれ、子どもが安全に安心して過ごすことができ、子どもの発達をより促進できるように保育者が保育できる環境になることが望ましい。そのためには何が必要なのか。“適切ではない保育”は明確となる中、“保育の質が高い”という評価は、果たして誰を主体として、何を基に、目指すべき水準はどこなのだろうか。どのように評価することが適切なのだろうか。さまざまな視点から評価スケールが開発されるなかで、目標とすべき保育の明確化が必要となるのではないかと考える。評価を行って、現状を把握することができても、そこからどうしたらよいのか、現場の多くの保育者に対して、保育の質を向上できる次につながるヒントがあれば、その後の実践にもつながり、評価スケールがさらに上手く活用できる。子どもにとっても保育者にとっても、良い環境が保障できる保育現場が増えることを望む。評価スケールの妥当性や、保育の質についての研究においては、さらなる調査研究が求められる。

注

- 1) OECD (Organisation for Economic Co-operation and Development)
とは、経済協力開発機構のこと。国際経済全般について協議することを目的とした国際機関。
- 2) NAEYC (National Association for the Education of Young Children)
とは、全米幼児教育協会のこと。幼児期の実践、政策、研究を結びつけ

ることにより、出生から8歳までの全ての幼児に質の高い早期学習を促進するために活動する専門会員組織。

- 3) EPPE 研究 (Effective Preschool and Primary Education) とは、就学前教育の「質」に注目してイギリスで行われた大規模縦断研究。
- 4) LIS (Leveun Involvement Scale) とは、子どもの夢中度尺度とも呼ばれる。ベルギーのフェール・ラーバース教授が開発した保育の質を評価する尺度。
- 5) DRDP-PS (Desired Results Developmental Profile-Preschool: 望ましい結果のための発達プロフィール—プリスクール版) は、保育者がすべての子ども達の学び、発達、成長変化の様子を観察、記録し、振り返るための評価ツール。

引用・参考文献

- イラム・シラージ、デニス・キングストン、エドワード・メルウィッシュ著、秋田喜代美、淀川裕美訳（2016年）『「保育プロセスの質」評価スケール—乳幼児期の「ともに考え、深めつづけること」と「情緒的な安定・安心」を捉えるために—』明石書店
- 秋田喜代美・箕輪潤子・高櫻綾子（2007年）「保育の質研究の展望と課題」『東京大学大学院教育学研究科紀要』47, 256-272.
- 秋田喜代美・佐川早季子（2011年）「保育の質に関する縦断研究の展望」『東京大学大学院教育学研究科紀要』51, 217-234.
- テルマ・ハームズ、デビィ・クレア、リチャードMクリフォード、ノリーン・イエゼジアン著、埋橋玲子訳（2018年）「新・保育環境評価スケール②〈0・1・2歳〉」法律文化社
- 埋橋玲子（2018年）「諸外国の評価スケールは日本にどのように生かされるか」『保育学研究』第56巻第1号
- キャシー・シルヴァ（2016年）『「保育プロセスの質」評価スケール—乳幼児期の「ともに考え、深めつづけること」と「情緒的な安定・安心」を捉えるために—』明石書店 10
- テルマ・ハームズ、デビィ・クレア、リチャードMクリフォード、ノリーン・イエゼジアン著、埋橋玲子訳（2018年）「新・保育環境評価スケール②〈0・1・2歳〉」法律文化社

- 埋橋玲子（2019 年）「“グローバル” な保育の質の探求—グローバル？な視点でローカルに実践する—」『保育学研究』第 57 巻第 3 号
- 野澤祥子、淀川裕美、高橋翠、遠藤利彦、秋田喜代美（2016）「乳幼児保育の質に関する研究の動向と展望」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 56 巻
- 野澤祥子（2018 年）「保育の質とその確保・向上のために」『保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会（第 1 回）』資料 2-3
- 保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会（2020）議論のとりまとめ—「中間的な論点の整理」における総論的事項に関する考察を中心に
- 埋橋玲子、岡部祐輝（2019 年）「保育環境評価スケール（ECERS）の保育現場への導入—評価を改善に結びつける、実践知の言語化のツールとして—」現代社会フォーラム No. 15
- 鈴木正敏（2014 年）「幼児教育・保育をめぐる国際的動向—OECD の視点から見た質の向上と保育政策—」『教育学研究』81(4) 460-472
- 遠藤純子（2020 年）「乳児保育の質をめぐる現状と課題 —関係性をベースとした保育の展開に向けて—」『学苑・初等教育学科紀要』No. 956 2～17
- 藤澤啓子、中室牧子（2017 年）「保育の「質」は子どもの発達に影響するのか—小規模保育園と中規模保育園の比較から—」『RIETI Discussion Paper Series』17-J-001
- テルマ・ハームズ、リチャード M クリフォード、デビィ・クレア著、埋橋玲子訳（2016 年）「新・保育環境評価スケール①〈3 歳以上〉」法律文化社
- Dahlberg, G., Moss, P., & Pence, A. (2013) Beyond quality in early childhood education and care: Languages of evaluation, 3rd edition. New York: Routledge.
- OECD（2006 年）Starting Strong II: Early Childhood Education and Care, OECD Publishing.
- OECD（2012 年）Starting Strong III: A Quality Toolbook for Early Childhood Education and Care, OECD Publishing.